わざ〳〵對句の漢語に換ゆるものあるは如何にぞや、

○音樂に、かたりものとうたひものとの區別あり、琵琶歌淨瑠璃等の如きは、物語に基きて節をつけたるものにて、かたりものに屬す、詩歌の朗詠の如きも、此種類と稱するを得べし、うたひものとは、琴歌長歌等の如く、詞よりも其節に重きを置けるものにて、中には全く詞なしの曲もあり、五段六段の調べの如き是なり、かたりものは、其語る事柄の思白きにて人の注意を惹き、うたひものは、事柄よりも曲節の美を以て人に樂みを與ふ、其發達の前後を云へば、うたものは、かたりものに次て進化したるものにて、音樂の理法より云へば、無論上乘に位するものなり、（某文學士投）

●寤寐感錄（二）

言論の自由は半ば（比較的に江戸時代より）許されたり、而して言ふもの論ずるもの〻中に、或る他の陰微を摘發して得々たる一種の操觚者あり、言ふべきものあつて之を爬羅し、論ずべきものあつて、之を剔抉する、固より可なり、然りと雖も之を言論するもの必ずしも直言直筆ならず黃白の爲めに筆舌を賣り、苞苴を以て虛喝を逞ふす、余遂に其是なるを知らず、言ふもの論ずるもの宜しく正々、眞摯のことをなさゝる可らず、喝、

辨妄　人あり我が陰を發く、我亦彼れが虛を咀ふ、叨りに毒舌を弄して中傷讒誣すれば、頻りに惡筆を舞はして罵詈嘲笑す、其言ふ所宛から車夫馬丁の如く、其記する所恰も田夫野人に似たり、暴を以て暴に代ふるもの、余終に其是なるを知らず、妄を辨ずる宜しく堂々、君子の爭ひならざるべからず、喝、

攻擊　するもの必ずしも直言直筆ならず、辨妄する者亦必ずしも正々堂々たらず、言ふもの眞にその然るを認めず、辨ずるもの亦内に省みて疚しき所なきか、猥りに虛文を弄して自家の非を蔽ひ以て江湖を晦ますの輩、終に眞理を掩滅して毒言は益〻爛なり、具眼の士、達識の人これを見は果して如何、余遂に其是なるを知らず、言論、攻擊、辨妄、共にこれ道德の制裁を免るゝ能はず、而も宗教と云ひ文學と云ふ文字の下に生息せるもの亦往々醜と呼ばれ怪と稱せらる、余之を何とか云はん、世は惟道德の一あるのみ、噫、

非國家的文士　文明何者ぞ、開化何者ぞ、書を

讀む何の爲ぞ、學を修むる何の爲ぞ、終極國家民人を利せんが爲にあらずや、我が弊を革め彼が美を採る、一に自國を益せんが爲のみ、政界に馳せ文海を漁るの何たるを問はず、國家の爲めにてふ觀念を放れて彼等はそれ何爲るものぞ、頃日坊間鬻く所の一書を閲す、是れ歐文直譯派一文士の著はす所にして、江戸時代の儒家物茂卿の生涯を評論せるもの、近々八十枚の一小冊子にして完全のと固より望むへきにあらずと雖も亦一種奇怪なる文躰を以て讀者の眼光を瞞着し去る處、感ずるに足るものあり、中に著者は徂徠が支那癖を論せんとして、『孔子の畫像に題して日本國夷人物茂卿拜手稽首敬題』と書けり、彼れは之れが爲めに世に笑はれたり、然れども彼れは毫も之を意とせざりしなり、』と記し、『彼れの天眞爛熳瑕瑜悉く掩はざるを見る』、と賞め、『言ふ迄もなく彼の自信也、彼の明白なる自認なり。』と感じ、『區々たる禮儀の彼を羈縛する能はず、區々たる才子の彼れを妬ましむる能はざりし所以なり、彼れは所謂足風雲を躡し、氣斗牛を呑む者也、爰んぞ下界の人間と相爭はんや』、と三歎三揚せり、徂徠の支那癖古來尚も日本國の何物たるを知れるものゝ其暴言を罵り、其面に唾き、其肉を啖はんと欲するもの、而るに著者は、世に笑はれたり、とのみ記し却て賞揚贊歎して措かざるもの抑も何そや、余輩は直ちに著者を以て、徂徠の亞流なり、徂徠の崇拜者なりとなすものに非ずと雖も、少なくとも潮流に激せられて、霧中に彷徨する青年の眼光に這般の文字の映ずるあらんか、延て國家的觀念に影響するなからすと云はんや、否先輩文士――少なくとも――たるものゝ妄りに寫すへきの文字なるか、咄、

此派の筆法

往々這般の放言を逞ましふす、十錢書籍（ペンセンブック）として名高き、大々的廣告の効果として、時に本家本元の□□迄、厄介を掛け、本家の之を曲筆辯疏する苦しさを餘所に見流す著者等の不親切、否不得策を憫ますんば非ず、（熊本指原氏の演說――某雜誌社說ェピナ氏の論文一例）著者等は强て「批評」と云ふ文字を楯として批評家の眼中豈自他の別あらんや、敢て此等の說を爲すものは頑迷者流にして評論の何者たるを知らざる愚物なりと道れん耶、余復た何をか云はん、余は評論の何者たるを知らざる愚物なりとの評を戴くも、なは非日本人と云はるゝの切なきを思ふものなり、況んや敢て這般の文字を羅列せされはとて批評家の責を盡すにあまりあるを知るに於てお

や、――嘯、（塵外子）

●むだ言

人物論　當世流行の才子一名獨斷史家と稱えらるゝ一派の面々、此頃頻りに名を古人を傳するに借りて人物評論を逞ふす、是非得失はおのづから定論の存するあれば特には云はず只思ふ、一片の精神深く感得する所あり、至誠滿腔、千古の信念を提て前に俊英を空ふし、後に青史を彩るもの將た何の處ぞ、徒らに古人を評隲するものゝみ多くして、これを心に得て知行の一なるもの遂に無なるか、論多く空に人覇行を事とす、滔々たる人物論の績を觀來れば棘然として寒きを覺ゆ、思を同ふするものあるや否、

操觚者　今の新聞記者諸公程エラキ人はなかるべし、職は社會の耳目として一世の木鐸たるへき重任を負ひ、筆は不羈獨立直ちに思ふ所を寫して世に公にす、一字一句の績を究むれば統計表に上らざる影響計るべからず、すべて任の重き程人物は優れ居るなるべし何となれば人先つ服してこれを推し、次に心、己を許して然る後重任に當る人常に大事を辱しめず能く其務を完ふするを得ればなり、我をも知らず獨り許してエライ者と考へ進んてこの社會必須の重任に當るか如きは今の新聞記者中到底あるまじく思はる、豈エラからずやと、さる人の語を其儘

精神界　一國の盛衰は精神界の如何にかゝはる事固より論なし、社會の精神は統計表以外に至大の影響を及ぼす事これも亦論なし、近二三年本邦精神界の事、實に云ふに忍びざるもの多し、其中新聞雜誌の與て罪を負ふへきもの少しとせず、文壇に名ある某雜誌の如きもとより社會に與へたる裨益皆無とは云ふべからざるも一時の小策を以て精神界を攪亂し吹き荒む濁風を一種の方面より助けたること極めて多し文辭の巧妙何かあらむ内一片の至誠なくんは萬事休まむ、一方に偏せし眼もて千百載に透徹すと想像し直ちに獨斷して憚るなし。精神界の前途に眼を注くもの須らく深憂して可なり。

徒ら事　何を標準に取りてか、將た何の思ふ所ありてや、ふと左の一表を得たり

楠本正隆＝坪内逍遙　安部井磐根＝森　鷗　外
新井章吾＝福地櫻痴　田中正造＝正直　正太夫
島田三郎＝尾崎紅葉　中村彌六＝嵯峨の屋主人
尾崎行雄＝幸田露伴　工藤公幹＝村上　浪六